

# 日建連建築セミナー開催報告 作品づくりと社会貢献の両立を目指して

日建連は、日建連建築宣言に示された基本方針の一つである「世界に誇れる未来の建築文化の創造」に向けた活動の一環として、毎年、建築セミナーを開催している。セミナーでは、活躍中の建築家を講師に招き、会員企業に加え、建築を学ぶ学生や設計業務に携わる若手を対象に、講演及び対談を行っている。

今年度は坂 茂氏を講師に迎え、「作品づくりと社会貢献の両立を目指して」をテーマとして、二〇二五年十月十五日、東京証券会館八階ホールで開催した。坂氏は、下瀬美術館（竣工二〇二三年、日建連表彰二〇二五第六回BCS賞受賞）やタマディック名古屋ビル（竣工二〇二一年、日建連表彰二〇二五第六回BCS賞受賞）などを手掛けている。セミナー参加の事前申し込みには定員を大幅に上回る応募があり、同氏の活動に対する関心の高さが

うかがえた。会場には学生や社会人を含む幅広い層が参加し、アンケートでは約九八%が「満足」「やや満足」と回答した。

## 社会貢献としての建築実践

坂氏は、建築の能力や知識が限られた一部の人に向けて使われている現状に疑問を抱くようになったという。そうした状況に抗うように、建築を社会へ開く活動を始めた。ルワンダの内戦を逃れた難民キャンプの劣悪な環境を知り、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）ジュネーブ本部をアポなしで訪ね、紙管を用いたシェルターを提案した。提案はUNHCRの難民支援につながり、周辺国の難民キャンプで、緊急シェルター供給として実用化された。

国内でも自然災害が多発する。

東日本大震災では、簡易間仕切りシステム（PPS）を避難所へ持ち込み、組み立てながら説明を重ねた。当初は理解を得にくい場面もあったが、地道な活動を継続した結果、現在では複数の自治体と災害支援協定を締結し、災害備品としてPPSを備える自治体も増えている。

## 無駄を生まない建築

坂氏は「ものを無駄にしない建築」を心にかけているという。その姿勢は、帰国後の初期から設計活動に通底している。二〇〇〇年代以前、

東京のアクシスギャラリーで開催されたアルヴァ・アアルトの展覧会の会場構成では、木材を大量に用いて会期後に廃棄することを避けるため、再生紙の紙管を用いて空間を構成し、アアルト建築を想起させる要素を表現した。

近年では、コンクリート工事で一時的に用いられる型枠のあり方に着目する。タマディック名古屋ビルでは、CLTをRCスラブの型枠として用い、そのまま室内側の仕上げとして現しにした。型枠兼用のCLT床板はRCスラブと一体化することで、スラブの撓みを補強する役割も担っている。災害地のように資材調達が難しい状況での支援活動で培われた姿勢が、作品づくりにも表れている。



タマディック名古屋ビル

圧倒的な行動力と、機会を捉えてかたちにする実行力がいく

つものエピソードとともに語られた。

## 信じた建築を貫く意思

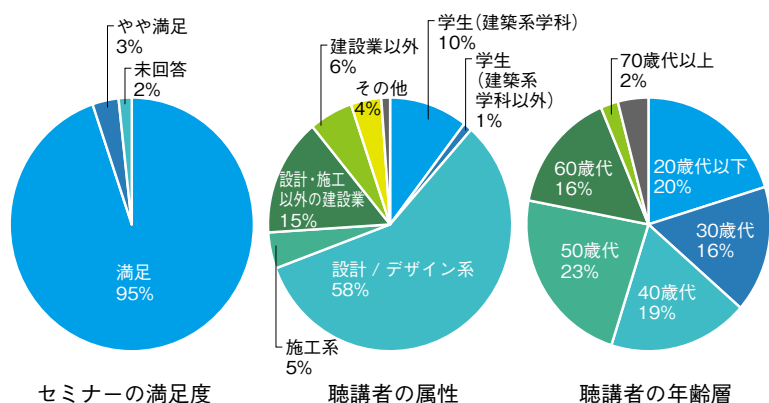
第二部の対談で、日建連建築設計委員会委員長の賀持剛一氏は、海外プロジェクトが困難に直面した際にも、坂氏が自らメーカーやエンジニアを探し出し、コスト内で実現していく点に感銘を受けたと述べた。坂氏は、理論的に可能なことは実現できると考えており、自分が信じたものを決して諦めないことが大切だと語った。若手設計者からの質問には、よい建築家になるために重要なのは、とにかく旅をしてよい建築を見ることがと述べ、講演を締めくくった。

対談の様子は、日建連のYouTubeチャンネルで公開している。



坂 茂氏の講演の様子（投影写真3点、撮影：平井広行）

## セミナー終了後のアンケート結果



日建連の  
YouTubeチャンネルは  
こちら

アンケートコメント（抜粋）

- ・設計する身として大切なことを考えなおす機会となりました（20歳代・設計）
- ・坂さんのジョークを交えたお話を楽しみながら聞くことができた。高校生の私でも理解ができるわかりやすい説明でとても勉強になった（20歳代以下・学生）
- ・ブリッカラー賞を受賞された大建築家でありながら、社会貢献活動にも尽力されていることに感銘した。学生と一緒に活動されていることも教育の観点から素晴らしいと思った（60歳代・団体）
- ・坂氏の多様な取組みが理解できた、現地を大切にして、現地調達可能な材料をアイデアで実現できる実行力に感心した（60歳代・設計）